

自然環境を活用した教育・保育

——「どろ遊び」の教材としての意義と価値について——

栗 山 陽 子

はじめに

本共同研究者らは、3年制の短期大学子ども学科に所属している教員集団である。2007年4月の開学科と同時に、子育て環境支援研究センターを設置し、ほとんどの教員が研究メンバーとして研究活動を行っている。そこでは、幼稚園・保育所・障害児通園施設（「現在児童発達支援センター」、以後この表記とする）の実践者、外部研究者を含めたメンバーらと「自然保育研究会」を開き、自然保育の実践と理論化に向けた取り組みを行ってきた。そして、2010年から「子どものしなやかな心とからだを拓く」ために有効と考えられる自然保育の実践記録をビデオカメラ等に収め、その研究成果を3回に渡って、日本保育学会で発表してきた。2010年には、テーマ「しなやかな心とからだを拓く自然保育」で、E園とC園とF園（本論文のp5表1参照）の長年に渡る自然を取り入れた保育実践記録を「自然とともに」「発見」「からだづくり」の視点で分析、考察したものを発表した。2011年には、テーマ「しなやかな心とからだを拓く自然保育2」で、F園のどろんこ遊びの実践記録を分析・考察し発表した。そして、2012年には、テーマ「しなやかな心とからだを拓く自然保育3—土粘土の変化を楽しむ活動を通して—」で、粉の状態から土に触れていく土粘土遊びの保育実践を分析・考察し発表した。筆者らは、このような研究活動を経て、土の粉に水を加えてどろへと素材が変化する過程における子ども達の「感覚（からだづくり）」「発見」を軸にした実践の有効性を明らかにしたいという思いに至った。そのことがこの度の共同研究に繋がり、研究テーマとなった。

本共同研究テーマ「自然環境を活用した教育・保育」の中で、教育・保育という言葉を使っている理由は、本共同研究が実践研究を中心としたものであり、幼稚園での実践は、幼児教育を行っているという位置づけられ、保育所・児童発達支援センターでは、保育を行っているという位置づけられているという実態としての現状認識からである。

しかしながら、幼児期の教育・保育を、「ケアと教育」という統合的なとらえ方をする用語「Early Childhood Education and Care : ECEC」¹が認知されるようになってきている。筆者らも乳幼児期の育ちに必要なのは、「ケアと教育」とあるという考えに立ち、それを保育(ECEC)という

言葉で表すことに賛成であるが、日本においては、まだ用語の統一はなされておらず、むしろ、「幼児教育」と「保育」を分けて考える方向性が懸念される。

この問題においては、本共同研究で、敢えて「教育・保育」と位置付けて、それぞれの施設で実践を展開した結果から、幼児期の「教育・保育」は区別すべきことではないということを最後の陳の論文で述べることにした。

I 研究の背景

1 子育ての環境の問題と課題

本共同研究の背景の1つに、現代の子ども達を取り巻く環境が劣悪化し、子どもの育ちに大きな影響をもたらしているということがある。子どもが置かれている環境とは、とりまなおさず、子どもを育てている大人が置かれている環境であり、筆者らはそれを広い意味での子育て環境と位置づけている。

子どもが育つ環境は、経済面においては、誰もが口にするように、経済不況が格差を生み、貧困が拡大して、子ども達が貧困の環境の中におかれている状況にある。家庭環境は、核家族化であり、少子化で一人っ子かあるいは兄弟が少ない。昔、存在した家族の中の小さな社会が存在せず、人間関係が育ちにくくなっているのも現実である。地域の環境は、助け合いや伝え合いの文化を無くし、孤立した家庭の集合体となっていて、子育てに孤独を感じさせている。社会環境は、経済優先に発展してきた影響で、迅速さ、効率化、利便性が良しとされ、遅いもの、手がかかるもの、無駄なものは排除されようとしている。これらの考え方は、育児の中に取り込まれ、子どもの育ちにも影響を及ぼしている。中でも、もっと気になるのが自然環境の衰退である。筆者が子育てをしていた35年前の1970年代と現在の家の回りの風景を比べてだけでも、歴然としている。砂利道はアスファルトに舗装され、レンゲ畑は消えて無くなり、ツクシを摘んだ土手はコンクリートで固められ、流れていた川はゴミと草で埋まってしまった。孫達にはもう見せることができない失われた自然の景色である。何より、土が身近な場所から無くなってしまったことを痛感する。「自然保育研究会」では、このように自然が失われていく環境の中で子どもが育っていることを直視し、その中でも特に「土」にまみれて遊ぶ機会が本当に少なくなっていることに着目した。そして、子どもの育ちに重要と思われる土に触れる環境を、大人の責任で作ри、具体的に支援していかなければならないという考えに至った。このような背景から、保育の実践現場と共同して、保育の中で子どもたちが土まみれになることを可能にする活動としての「どろ遊び」の保育実践研究に着手した。「どろ遊び」とは、保育現場等で広く使用されている「泥んこ遊び」とは区別して、本共同研究において「粉状の粘土質の土に水を加え、どろどろになった状態」のいわゆる「どろ」で遊ぶことをいう。

2 「子どもと自然のかかわり」の重要性

本共同研究のもう1つの背景としては、「子どもと自然のかかわり」が希薄になってきているという現状認識に立っていることである。その原因として、上記で述べた自然環境の悪化が上げら

れると共に、もっとも重視しなければならない要因として、とりわけ「乳幼児期における自然とのかかわり」の重要性の認識が置き去りにされていることである。

そこで、筆者らは、「子どもと自然のかかわり」の重要性を学び直し、その中から、特に「土」との関わりの重要性を再確認した。

(1) 「子どもと自然のかかわり」の学び直し

子どもと自然を結びつけた教育論を唱えた先駆者は、およそ 250 年前の教育学者 J・J ルソーであろう。ルソーは、『エミール』で、「生まれたときにわたしたちがもってなかったもので、大人になって必要となるものは、すべて教育によって与えられる。この教育は、自然か人間か事物によって与えられる」²とし、教育の先生の 1 つに「自然」をあげている。さらに、ルソーは、次のように述べている。「わたしたちは感覚をもって生まれている。そして生まれたときから、周囲にあるものによっていろいろなふうに刺激される。自分の感覚をいわば意識するようになると、感覚を生み出すものを求めたり、さけたりするようになる。はじめは、それが快い感覚であるか、不快な感覚であるかによって、次にはそれが、わたしたちに適当であるか、不適当であるかを認めることによって、最後には、理性が与えられる幸福あるいは完全性概念にもとづいて下す判断によって、それをもとめたりさけたりする。」³ここに書かれている中に、筆者らが研究を進める上で学ぶべき、自然に対する考えを見出すことができる。乳幼児が、自分の感覚を意識するようになる時期に、子どもが自ら快か不快かを感じ取りながら感覚を磨いていくことが重要で、そのためには、土に触れる経験が必要であると位置づけられる。土は感覚を刺激し、感覚を敏感にすることが期待できることから、土をルソーが唱えた教育の先生としての自然の一部であると考え、本共同研究の実践で土を使用した活動を展開し、それらで子どもが遊んでいる姿から、土の重要性を再認識したいと思う。

土に触れることが当たり前でできていた時代から、土が子どもの育ちに欠かすことができない素材であることを実践例を通して訴えてきた研究者たちは多い。近藤（1980）は、「子どもが、生きがいをもって人生を歩める人間となるために必要な条件として、1 つは、自然（具体物の世界）、その中で身をもってする経験です。もう一つは、言語（具体物を抽象概念に転ずる道具）、それを駆使して思考の世界に入ることです。」⁴と述べた。近藤は、乳幼児・学童の多くの実践例を挙げて、自然物での直接体験の重要性を示した。阿部（1983）は、「土で育つことは、人類誕生以来人間の生命を支えてきた自然の恵みに目を向けることを通して育つことである」⁵と述べている。また、井上他（2010）は「子どもにとってとりわけ、砂や土や水や日の光や風などは素材としてかかわりやすく、自然の特性を感じさせるものであります。（中略）またその素材として特徴は、人工的なものと異なる複雑さを持つに違いありません。小さな単位に分かれることや独特の感覚がそうです。」⁶と述べている。筆者らは、これらの説の自然物での直接体験の重要性を大切に考え、自然の特性を持つ土を素材とした活動を展開させて、自然と子どもとのかかわりを実現させたい。それが土を教材とした保育実践であり、保育現場において誰でもが取り組める土の実践活動として位置づけられるようにしていきたいと考えている。

(2) 幼稚園教育要領・保育所保育指針の子どもと自然について

幼稚園・保育所で展開される保育の内容は、『幼稚園教育要領・保育所保育指針』の中に、発達
の側面から5つの領域にまとめられている。その中の「環境」の領域の中で、「直接触れる体験を
通して、幼児の心が安らぎ、豊かな感情、好奇心、思考力、表現力の基礎が培われることと幼児
が自然とのかかわりを深めることができるよう工夫すること」⁷と記されている。「どろ遊び」を、
ここでいう幼児が自然とのかかわりを深めることができるよう工夫した直接触れる体験活動とし
て位置づけたいと思う

(3) 幼稚園・保育所の現状に関する問題

幼稚園や保育所の現状に目をやると園生活の中で、泥んこになって遊ぶという体験は、限られ
た幼稚園や保育所でしか実施されておらず、ほとんどの園は、日常的な砂遊びや泥団子作りで土
に触れる体験に留まっていると推測される。さらには、園庭での砂遊びや土いじりでさえ年々減
少してきている傾向にあると推測される。これらの傾向の理由として、「脳トレ」と称される活動
がブームになり、脳を刺激するプログラムを組んで、繰り返し行う方法で活動している幼稚園や
保育所があることを見聞きするようになってきたからである。つまり、五感を刺激する自然体験
的な活動よりも、脳トレなどによる活動などで脳を刺激することが重要視される傾向が出てきてい
ることである。もう1つの理由として、園庭が芝生化され、園庭から土いじりする土が消失する
という事態が起きていることである。これもまたブームとして広がりつつあり、M市では、10数
ヶ園ある公立保育所の園庭を全面芝生化するという事例が出てきているほどである。さらに、親
の中には、子どもが土に触れることに対して、汚れるという感覚を持っていて、「体に砂が付くか
ら砂場遊びはさせないでほしい」とか「芋ほりは、軍手をはめてやらせてほしい」などの要求が
幼稚園や保育所に届くという実態がある。

このように、子ども達の中には、土まみれ泥まみれになって遊ぶことがないまま大人になって
しまう状況が出てきているのではないだろうか。そういう意味において、乳幼児期を過ごす幼稚
園・保育所は、子ども達が土や泥に触れる環境を作り出すことができる最適な場所であり、そうい
う環境を作り出さなければならないと考える。

Ⅱ 研究概要

1 研究目的

本共同研究の目的は、研究背景で述べた「子育て環境の問題と課題」や「子どもと自然のかか
わりの重要性」の背景を受けて、自然環境を活用した教育・保育が子どもの心とからだの育ち
に及ぼす好ましい影響を明らかにすることである。そのために、本共同研究において、筆者ら
は、陶芸用の土の粉を用い、粉から遊び始めるどろ遊び・粘土遊びの活動を、昨年度までの先
行研究を経て確立させた。そこで使用する陶芸用の土を「土粉」と名付け、「土粉」で遊ぶ一連
の活動を「土粉遊び」と名付けることとした。以後この表記を使用する。「土粉遊び」の保育実
践の中から中心的な活動の「どろ遊び」の教材としての意義と有効性を明らかにする。「土粉遊

び」で使用する粘土質の土の感触は、幼児の視覚や触覚を刺激し、水を加えることによって、色、手触りなどの素材自体が変化する楽しさを体験することができる。また、可塑性に富んだ素材から創造的な製作や身体活動が誘発されることが期待される。さらに、時間が経過して固まった土は、砕いて粉状にすれば、再度、粉からの使用が可能であることから、継続可能な循環型の素材と捉えることができるであろう。

2 研究方法

(1) どろ遊びや粘土遊びに関するアンケート実態調査の実施

本共同研究を進めるにあたり、幼稚園・保育所・児童発達支援事業（児童福祉法に基づき障害児通所支援を行う「児童発達支援事業所」と「児童発達支援センター」がある）においてのどろ遊びや粘土遊びは、どのような材料で、どのように行われているのか、その実態をアンケートにより全国調査として実施した。「どろ遊び」「粘土遊び」をキーワードにして、東日本大震災の被災地を除く全国から抽出した、幼稚園・保育所・児童発達支援事業の合計 526 ヶ所にアンケートを依頼し研究の対象とした。調査結果と分析・考察は、武と松山の論文で述べている。その際に、アンケート調査対象の幼稚園・保育所・発達支援事業を合わせて「施設」と表記しているのでご留意いただきたい。尚、アンケート調査抽出方法及び調査結果とアンケート調査用紙は、巻末に資料 3・資料 4 として記載している。

(2) 「土粉遊び」の保育実践と観察・記録及び分析・考察

保育実践の対象園は、自然保育研究会で共同している 3 ヶ園と近隣に所在する 3 ヶ園の合計 6 施設とした。6 施設の概要は、巻末の資料 1 を参照されたい。

表 1 6 施設の表記と種別一覧表

| 園 名 | 種 別 | 園 名 | 種 別 |
|-----|------------|-----|---------------|
| A 園 | G 市公立保育園 | D 園 | H 市私立幼稚園 |
| B 園 | G 市公設民営保育園 | E 園 | I 市私立幼稚園 |
| C 園 | G 市私立保育園 | F 園 | J 市児童発達支援センター |

「土粉遊び」は、ガイロメ土（陶芸に使われる粘土質の土）等を使って、上記の 6 施設で実践した。どろの変化から生み出される素材の質的变化を子ども達が五感を通してどう受け止めているかを観察記録とビデオカメラやカメラで実践を収録し、データ化し、実践の検討を行った。

本共同研究の成果は、共同研究者らが各専門分野の視点から保育実践を分析・考察して教材が持っている教育効果や意義について論述した。陶芸作家で造形表現専門の江村が「土粉遊びの実践とその効用」、身体表現専門の佐々木が「土粉遊びにおける行動の変化に関する一考察」、障害児保育専門の藤林が「土粉遊びが発達支援に与える影響」である。最後に、発達心理学専門の陳が「子どものやる気をくすぐる自然素材の研究」で専門分野からの視点での論述と本共同研究のまとめと今後の活動の展開を示した。

(3) 倫理的配慮

本共同研究における倫理的配慮としては、アンケート調査においては施設名等が特定されない

ように無記名としたことや、保育実践においては観察・ビデオカメラ・カメラでの実践の収録に際し、6施設長に個人情報の充分な管理と適切な処理を行うことを申し添え、許可を得ている。また、本論集に掲載されている6施設やそこでの子どもたちが特定されないように配慮した記述となっている。研究結果は、本論集を6施設に送付することにより開示する。

(4) 保育系学生の泥んこ遊びに関する認識調査

上記の二つの研究方法のほかに、筆者が担当する授業の中で、保育系の学生たちに対し「泥んこ遊びに関する認識調査」を行った。以下は、その結果と考察である。

1) 調査目的

保育系の学生たちに、本共同研究の保育実践で子どもたちが行うどろ遊びに関心を持ってもらうことと学生たち自身が幼児期に体験した泥んこ遊びがどのように記憶に残っているのかを知ることが目的に実施した。

2) 調査対象

本校子ども学科の1・2年生 女性38人 男性9人

3) 調査方法

アンケート用紙の①～⑤の項目に回答する

4) 調査結果と考察

①通園した施設 女性：保育所16人 幼稚園16人 その他（転園し両方に通った）：3人
男性：保育所4人 幼稚園4人

②通園した施設で泥んこ遊びをしたか（はい いいえ 不明）

表2 泥んこ遊びをしたかしなかったか

| | 保育所 | | 幼稚園 | | その他 | |
|-----|-----|----|-----|----|-----|----|
| | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 |
| はい | 15人 | 3人 | 14人 | 1人 | 1人 | 0人 |
| いいえ | 2人 | 0人 | 1人 | 0人 | 0人 | 0人 |
| 不明 | 2人 | 1人 | 1人 | 1人 | 2人 | 0人 |

学生達は、保育所では78%が、幼稚園では71%が泥んこ遊びを経験したと記憶している。

現在5歳児の子どもたちが15年後に大学生になったときに、泥んこ遊びを記憶しているという比率は、どのくらいであろうかと考える。現在の子どもの園生活の様子から推測すれば、きっとこれほど高い数字は出ないであろうと思う。

③上記で、「はい」と答えた人の「泥んこ遊び」の内容（自由記述）

表3 「泥んこ遊び」の内容

| 保育所 | | 幼稚園 | | その他 |
|--------|--------|--------|--------|--------|
| 女 | 男 | 女 | 男 | 女 |
| 泥だんご作り | 泥だんご作り | 泥だんご作り | 泥だんご作り | 泥だんご作り |

| | | | | |
|---|-------------------------------|-----------------------------------|-----|-----|
| 山作り ままごと 砂場に水を入れ遊ぶ ケーキ作り 泥んこ遊び | ダム作り トンネル作り 泥投げ 泥を踏む | 山作り ままごと トンネル作り バケツケーキ作り | 山作り | 山作り |
|---|-------------------------------|-----------------------------------|-----|-----|

学生たちの記憶から、「泥んこ遊び」の実態は、園庭での泥団子づくり、(水をいれた)砂場での山づくり、トンネルづくりが定番であったことが伺える。男子学生が、泥投げや泥ふみを記憶していることから、大胆な泥んこ遊びも展開されたことが予想される。

④「泥んこ遊び」で記憶に残っていること(複数回答可)

ア水が混じった土が泥になった手触りの感触

イ泥のにおい

ウ泥で作ったもの

表4 「泥んこ遊び」の記憶

| 通園した施設名 | 保育所 | | 幼稚園 | | その他 | |
|-----------|------|-----|------|-----|-----|-----|
| | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 |
| ア 手触りの感触 | 15 人 | 3 人 | 11 人 | 3 人 | 1 人 | 0 人 |
| イ 泥のにおい | 1 人 | 2 人 | 2 人 | 1 人 | 0 人 | 0 人 |
| ウ 泥で作ったもの | 11 人 | 2 人 | 8 人 | 2 人 | 1 人 | 0 人 |

泥んこ遊びで記憶に残っている感覚では、「手触りの感触」が、保育所、幼稚園、男女のすべてを合わせて70%になっていて、土に触れた感覚がいつまでも記憶に残ることが理解できる。また、泥のにおい感覚を記憶している学生が、19%いたことでは、遊び方の工夫次第で、子どもたちが泥で遊び込み、土のにおいを感じ取ることができるという確信が持てる。

⑤「泥んこ遊び」について、成人した現在のあなたはどんなことを考えているか。(自由記述)

- ・最近、汚いものとして泥んこ遊びを位置づけることが世間の強い意識になりつつあるが、子どもの頃には、泥んこ遊びを楽しく自然と触れ合う良い遊びだと思うので子どもにはいい遊びだと思う。
- ・泥んこ遊びは外遊びのなかで一番行われているものだと思うし、とても奥が深いと思う。
- ・ペタペタする感じや冷たい感じが記憶にある。今でも子どもたちが楽しそうに遊んでいたのいいと思った。誰もが経験し、いろいろな感触が楽しめると良いと思う。
- ・泥んこ遊びは、今大人になった自分でも楽しめると思うし、子どもの想像力を育てる大切な遊びだとも思う。感性を豊かにできる。
- ・ひとりでも遊べる遊びだと思うし、みんなでも楽しめる遊びだとも思う。
- ・普通の砂とは違って水が含まれているから、いろいろな形のものを作れて子どもにとって遊びが広がると思う。
- ・小学生の時にピカピカの泥だんご作りにはまって、よく遊んでいた。その時、すごく楽しかった

し泥の感触がおもしろかったのを覚えている。

- ・泥んこ遊びはどの年齢でもできる遊びで飽きなくていいなと思う。
- ・機会があれば、もう一度ピカピカな泥だんごを作りたいなと思う。

学生たちは、自己の体験に基づいて、「泥んこ遊び」が子どもにとって大切な遊びだと位置づけていることがわかる。学生たちは、経験したことを語り合いながら、楽しそうにアンケートに答えていた。その瞬間には、感覚の記憶が蘇っていたのではないだろうかと感じた。泥んこ遊びを経験した学生たちが保育者となり、土に触れたり、泥まみれになって遊ぶことの大切さを実感として理解して保育実践をすることの意義は大きい。本共同研究で実践した「どろ遊び」が子どもたちにとって、遊びの伝承として繰り返されていくように、本共同研究の成果を学生達にも広めていきたいと思う。

3 研究の特徴

(1)「土粉遊び」の保育実践展開

幼稚園・保育所における「土」に触れる遊びの代表的なものは、「砂場遊び」である。砂場遊びと子どもとの関わりに関する研究は、笠間浩幸により発達の研究がなされ、砂の感触が、手のひらや指への直接的な刺激を与えることをすでに明らかにしている。しかし土粉を用いた粉遊びやどろ遊びの発達の研究はほとんど行われていない。また、土遊びを活性化させるのに適した土の成分を研究している竹井史（2006）は、山砂や粘土を混合した土を園庭での「利用土」として見出している。粘土成分を多く含む土は、乾燥時にカチカチの状態になることから、園庭における土遊びにはふさわしくないとしている。

筆者らが、土粉として使用する土は、砂より大変粒子が細かい土で、小石、落ち葉、枯れ草、枯れ木等の不純物を含まない粘土質の粉状の土である。粉状の土はそれに水を加えることによって、土が複雑な特性を示し、小さな単位に分かれることや独特の感覚を得ることができ、その中で子ども達が表す様々な行動の変化から素材の持つ有効性、優位性を明らかにしていくことが可能となる。素材の土粉は、「ガイロメ土」「黒木節土」「白木節土」などすべて陶芸に使われている粉であるが、それらは可塑性が最も高く、不純物が少ないことから衛生的である。値段も、20kg（1袋）2000円と手頃であり、高価なものではないので、幼稚園やで保育所で使う教材としては利用価値が認められる。

(2) 土粉の可塑性を活用した循環型の保育活動の展開

土粘土を使った「どろ遊び」実践の先行研究では、山口芸術短期大学教授佐藤智明が10年以上継続研究している。佐藤は、K県O市P園において、毎年1回の大々的な「どろ遊び」を10年近くに渡って実践し、成果を上げている。その取り組みは、大掛かりなもので、園庭にブルーシートを敷き詰め、ジャンボたらい12個、コンテナ、ビニルプール、ボール（容器）60個、たわし60個、スポンジ40個（体を洗うため）、濡れたタオル40枚（泥が目に入った時に拭くため）を園が用意する。佐藤が粉末粘土4袋（30kg入り）、練った粘土150kg、トロ箱5個を持参し、活動が展開される。

筆者を含め研究メンバーの3人は、2012年8月8日に実施された1園の「どろ遊び」実践現場を視察した。3～4歳児の60人により、どろ遊びは、はじめは静かにスタートし、徐々に活動的に展開されていった。遊び始めから体を洗って終えるまでの時間は、1時間30分に及んだ。

筆者らの関心事は、「どろ遊び」の活動を、いかに手際よく合理的に実践しているかということであったが、「どろ遊び」の環境を作り出し、子どもたちが満足するまで遊ぶためには手抜きや合理性はなく、準備から片付けまで多くの大人の手が必要なこと（もちろん子ども達がやれることは、自分たちで行う）が分かった。

本共同研究の「土粉遊び」の保育実践活動スタイルは、佐藤の「どろ遊び」の実践を参考にして、江村が設定したものである。江村は、3つの点で特徴ある活動スタイルを作り出した。1つめは、土の粉で遊ぶ時間を、子どもの様子を見ながら十分に取っていることである。つまり、粉から遊びを始めることを大切にしたい。2つめは、素材の土を、粒子が細かいもの（水を含ませるとよく滑る）を使用していることである。これにより実に大胆で予想をはるかに超えた子どもたちの多様な行動が見られた。3つめは、粉に水を加え、ダマ（水分を含んでコロコロに固まった状態）に変化した土で遊び、さらに水を加えて「どろ」にして遊び、再度粉を追加し、粘土へ変化させたものの遊ぶという一連の流れを子どもの行動を主体にしながら設定していることである。そして、固くなった粘土を木槌で砕いて粉に戻し、再度粉から遊び始めるという循環型の活動を提案している。これらの保育実践活動の詳細は、江村の論文の中で中心的内容として述べている。

4 研究活動経過

本共同研究は、日本私立学校振興・共済事業団「平成24年度学術研究振興資金」の助成金を受け行ったのものであり、研究活動は、平成24年度学術研究計画調査に沿って進行してきた。

その内容は、以下の通りである。

- (1) 「どろ遊びや粘土遊びに関するアンケート実態調査」の実施と分析は、アンケート班の4人の共同研究者が中心となって行った。期間は平成24年6月～9月であった。データーの入力と考察は、平成24年10月～12月に行った。
- (2) 「粉からどろ遊びへ」の保育実践と記録収録は、実践班の6人を中心に全共同研究者が総力を挙げて取り組み、平成24年6月～9月に延べ8回実施した。
- (3) 先行実践研究「泥んこ粘土遊び保育実践」の視察を、平成24年8月に共同研究者3人がK県O市P園へ出かけ行った。
- (4) 計画調査では、計画していなかった「粘土遊びから陶器づくりへ」の保育実践は、実践現場の要望を受け、江村が中心となり平成24年12月～平成25年2月に2ヶ園で実施した。
- (5) 保育実践のビデオカメラ収録のデーター収集と分析は、平成24年9月～平成25年2月に、毎月1回の研究会を開催して行った。
- (6) 共同研究者らが行った本共同研究の全体のあらましと全国アンケート調査の結果、土粉遊びの実践の分析、考察及びまとめと課題は6論文に分けて平成25年3月末発行の「子ども学研究論集（第5号）の特集号」に投載。

Ⅲ おわりに

本共同研究の6施設での「土粉遊び」の保育実践において、幼稚園実習を経験した2年生と1年生を中心に呼びかけをし、学生スタッフとして教員とともに保育現場での活動に次の順番で参加してもらった。1. 準備をする、2. 現場でレクチャーを受ける、3. 実践中は子どもとかかわる、4. 後片付けをする、5. 実践後に反省会に参加する、6. 感想や反省点を記入する、を毎回行うというものであった。学生たちは主体的に参加した。その数は延べ94人に達し、この学生たちの力が、本研究に大きな役割を果たした。その活動実態は江村の論文に詳細に述べられているので参照されたい。

また、共同の研究を進める上で、6施設が、実に積極的かつ協力的で、共同の精神で取り組んでいただけたことは有難かった。それらは、次の内容であった。(1) 事前打ち合わせ、(2) 教員と学生を合わせ15人ほどの研究班の受け入れ、(3) 「粉からどろ遊び」の保育実践を展開するときの保育者の協力体制、(4) 実践後の反省会の開催、(5) 実践後の子どもたちや家庭の反応の様子記録等で、そこに本共同研究への共感的姿勢が感じられた。

最後に、子ども学科の教員集団にとって、本共同研究は、子どもたちへのまなざし、学生への教育的指導、地域の保育関係者との共同という点で、子ども学科が目指すべき方向性を確認する良い機会となった。学科設置から7年目で、保育実践に関わる学術研究を共同で取り組めたことは、子ども学科の礎を築く意味で、感慨深いものがある。この研究を今後も続けて発展させ、本共同研究でつくり出した「土粉遊び」を保育現場に広めていくことが筆者らの役目であろう。「子ども学研究論集 第5号 特集号」を多くの保育関係者に読んでもらい共感を得ることができればこの上ない喜びである。

【注】

- (1) OECD（経済協力開発機構）の報告書「人生の始まりを力強く（Starting Strong）2010年」は、近年の先進諸国の保育・教育政策の動向を調べてまとめたものである。その中で、「ゼロ歳から就学前の子どもたちにケアと教育を提供しているあらゆる手段」を包括する用語として、「乳幼児期の教育とケア：ECEC」を持ちいることを提起している。（鈴木佐喜子（2010）『乳幼児の〈かしこさ〉とは何か』大月書店 p 128）
- (2) ルソー（1792）p 29.
- (3) ルソー（1792）p 31.
- (4) 近藤茂樹（1980）p 247.
- (5) 阿部富士夫（1983）p 176.
- (6) 井上美智子他（2010）p 20
- (7) 文部科学省（2008）p 19.

【参考文献】

- 阿部富士夫（1983）『遊びと労働を生かす保』国土社
- 江村和彦・竹川雅子・栗山陽子・松山有美・渡邉さらさ（2012）「しなやかな心とからだを拓く自然保育 3」『日本保育学会大会第 65 回大会発表要旨集』p 970.
- 井上美智子・無藤隆・神田浩行（2010）『むすんでみよう子どもと自然』北大路書房
- J・J ルソー（1762）『エミール』今野一雄訳 岩波書店
- 笠間博幸（2001）『〈砂場〉と子ども』東洋館
- 近藤茂樹（1980）『子どもと自然と発達と』あゆみ出版
- 文部科学省・厚生労働省（2008）『幼稚園教育要領・保育所保育指針』チャイルド社
- 竹井史研究（2006）「子どもの造形的な遊びを活性化する土環境に関する考察」
- 竹川雅子・栗山陽子・陳恵貞・吉田幸恵（2010）「しなやかな心とからだを拓く自然保育」『日本保育学会第 63 回大会発表要旨集』p 161.
- 吉田幸恵・渡辺三保・竹川雅子・栗山陽子・陳恵貞・藤林清仁（2011）「しなやかな心とからだを拓く自然保育 2」『日本保育学会第 64 回大会発表要旨集』p 233.

（名古屋経営短期大学子ども学科 教授）